慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	杉栄著 理論統計学研究
Sub Title	
Author	寺尾, 琢磨
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.11 (1940. 11) ,p.2211(117)- 2214(120)
JaLC DOI	10.14991/001.19401101-0117
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19401101-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

此の小冊子は東印度會社の怒を買ひ、法律家等によつて「其の或る部分は叛逆に極めて近きものであり、而して自餘の總べては甚だしく危險なるもの」と看做され、將さに秩序を紊亂するものとして星衙門（Star Chamber. ウエストミンスター宮殿内に開かれた民刑事法院）に告發せられんとした。（State Papers East Indies, 1513-1616, pp. 381, 385; Court Minutes of the East India Company, ed. H. Stevens and E. B. Sainsbury, 22nd Feb. 1615.）。然るに、當時同會社の有力なる株主にサー・ダッドリィ・ディッグス（Sir Dudley Digges）なる人があつて、之れに答ふるが爲めに一書を刊行す可しとの意見を有して居つたが、同じ年に『貿易の擁護』（The Defence of Trade. In a Letter to Sir Thomas Smith Knight, Governour of the East-India Companie, &c. From one of that Societie.）と題する小冊子を出版して、有名なるトーマス・マンの東印度貿易擁護論の前衛戰を行ふことゝ爲つたのである。

杉榮著「理論統計學研究」

寺尾琢磨

現に我々の經驗しつゝある巨大な轉換期に際して、科學も政策も極度の實踐性を要求されるのは當然であるが、これが動もすれば理論閑却の風を齎らすのは遺憾との上もない。基礎的理論に透徹することなくして眞に效果的な實踐性は期待されないからである。事變以來統計の利用は各方面に亙つて目覺ましい發達を遂げつゝあるが、翻つてこれに關する理論的研究を顧れば、必ずしも晏如たり得ざるものがある。統計學に關する知識なくして統計を處理せんとするのは狂人が刄物を振り廻はすの類であつて、自他を傷ける之より甚だしきはない。即ち統計の利用が增大すればするほど、これが理論的研究の要請されねばならぬ所以である。この秋に當つて立命館大學教授杉榮氏の野心的好著「理論統計學研究」の上梓を見るに至つたのは、吾人の最も欣快とするところである。

本書の内容は多くは立命館大學法經學部の機關紙「法と經濟」に發表された諸論文より成り、主として大量觀察法の一般理論に關するものである。第一章「大量觀察法の本質」、第二章「大量觀察方法論の手續論的性格」、第三章「統計的方法の對象」、第四章「統計的總體の統計學的性格」、第五章「統計的總體の限界性」、第六章「構造的統計系列の理論」、第七章「非統計的方法一般に關する諸見解とその批判」、第八章「統計的方法の諸代用法の一般統計學的性

質」、第九章「一般統計的方法論」、第十章「蜷川博士の批判の G. von Mayr 批判の批判」、第十一章「社會科學に對する數の意義」、第十二章「移動季節變動指數」の十二章を收めてゐるが、最後の三章は附論に過ぎないといふ。

統計學の科學的性格については極めて異論の多いところであるが、教授は最も徹底した方法學的立場を採るもので、統計學を以て統計的方法を研究對象とする學問なりと規定する。統計的方法は更に大量觀察法と統計的解析法とに分たれるが、本書に於て教授が特に問題にされてゐるのは前述の如く前者、即ち大量觀察法である。教授にとつては統計學を一ケの實質科學と見做す所謂社會統計學派は勿論のこと、統計學を方法學としながらもその方法の對象を社會現象に限定せんとする一派（例へばジヂェーク、蜷川博士等）も亦根本的に誤れるものであつて、本書を一貫する指導理念は、この見解より從來の統計學者を批判しつゝ、純粹な方法學的統計學を建設することだと言へよう。統計學に對する教授の基本理念は私のそれと同一乃至極めて接近してゐるようで、私も嘗て「私自身は統計學を以て形式科學と解し、且つその取扱ふ集團は必ずしも社會的集團に限定すべきでなく……同時に、單に解析法に終始せず大量觀察の方法をも包含せしむべしと解してゐる」と述べたことがある（拙著、統計學の理論と方法、序文一〇頁）。併し私自身は未だこの見解を充分に展開するに至つてゐないに對し、教授は少くとも大量觀察法に關しては極めて獨創的な體系を示されたのである。私は未だ本書を卒然通讀したのみで、詳細な點に關しては批判すべき準備が成つてゐないが、理解し得た範圍では、その大膽な行論は一々肯けるものであつた。殊に第七及び八の兩章に於ける「代用法」の問題は著しく啓發的なものと考へられる。推算・標本調査・アンケート等の所謂代用法が「果して統計的方法としての方法形態をとつてゐるか否かは」確かに教授の言はれる通り「理論統計學に於ける最も興味ある問題の一つ」であるが（二二四頁）、これに關しては今迄のところ明確な規定はなかつたといへる。教授はかゝる混亂は統計學者の多くが之等を一括してそれと統計的方法或は大量觀察法との關聯を問題にしてゐた結果であるとし、「統計的方法の代用法に屬する諸方法を各々獨立な方法と考へ、此等の各々と統計的方法との關聯を追求すべきである」（二五二頁）と斷定する。「我々の立場に於ては、統計的方法は互にその性質を異にし、且繼起的關係にある二個の方法即ち、大量觀察法と統計的解析法とを內容としてもつてゐる。それ故統計的方法の代用法の中の特定の一方法が理論統計學上如何なる方法的性質をもつてゐるか否かは、それが大量觀察法的性質をもつてゐるか、或は統計的解析法的性質をもつてゐるかといふことを追求することによつて決定せられる」（二五五頁）と論じて、一々の代用法を吟味し、例へば推算を以て統計解析的な代用法たることを斷定されてゐる。これは恐らく正しい見方であらう。そして教授が「代表的方法については文獻を全部蒐集し得た、云々」と豪語されるところを見ると、この兩章は教授にとつても恐らくは快心の部分と思はれる。

最後の三章は附論的なものに過ぎないとのことであるが、その第十章の蜷川博士に對する批判は辛辣を極めたもので、曾て流行したマルクスを廻る論爭を髣髴たらしめる。教授の主旨は、G. von Mayr に對する蜷川博士の批判を批判することによつて、この偉大な社會統計學の巨匠を分析するにあるが、何れかといへば蜷川博士を擊つに急にして、Mayr 自身に對する批判は著しく後退してゐるようである。尤も教授自ら Mayr の體系を「紹介」するのが目的だと言明されてゐるところを見ると、彼に對する批判が二次的となつても差支へないわけではある。

次の第十一章「社會科學に對する數の意義」はフラスケムパーの所說の紹介である。統計學を確率論的に規定して Statistik の代りに寧ろ Stochastik（推定學）の文字を以てせんとする見解――これはウィンクラーの特に唱導するところで、私自身も著しくこれに傾いてゐる――に對して、フラスケムパーは統計學に於ける認識目的の二元性を

主張し、統計學と推定學との區別を要求してゐる。彼の所謂二元性とは、統計學の認識目的は「大數法則に照應する結果」であると共に、「かゝる蓋然論的見地が全然何等の役割も演ぜざるが如き別箇な結果（大量の範圍及び構造の報告等）」でもあるといふのである。この理論的對立に極めて困難なる問題を包藏して居り、之が解決は我々に課せられた最も重要な問題の一つである。併しこの章に於ては杉教授の積極的意見は窺ひ得ない。最後の第十二章は「數學的方法の精密なる理解、材料に關する科學的思惟、材料及び材料の背後に存在する自然的社會的背景とに對する充分なる理解の下に行はれる特有な推論方法が統計的解析法の方法形態」なることを說明し、かゝる統計的解析法の一例としてグレーブネル博士の「移動季節變動指數」を紹介したものであつて、經濟統計の觀點から極めて興味ある一文である。

既に述べた通り、本書では教授は統計的方法のうちその一半たる大量觀察法のみを問題とされたに過ぎぬ。從つて他の一半たる統計的解析法が充分に論述されて始めて教授の所謂一般理論の體系が構築されるわけで、本書が單に理論統計學研究と題されてゐるのも之がためであらう。この殘された他の半面が、こゝに取扱はれた半面と同樣の創意と透徹を以て示されんことは、獨り私のみの念願ではなからう。（立命館出版部發行、定價三圓八十錢）

（一九四〇・一一・一七）

塚原仁著「人口統計論」

寺尾琢磨

高崎高等商業學校教授塚原仁氏の「人口統計論」は人口學界の最近の一收穫である。序文に曰く「今や人口問題は東亞新秩序建設の一翼として其重大性が認識せられ、活潑なる論議の的となつてゐる事は周知の如くであるが、其中心問題の一は云ふ迄もなく出生減退である。而して此問題たるや其自身之を切離して考慮すべきものに非ずして、人口の構成、其發展、更に婚姻、死亡等の諸事象との有機的關聯に於て之を考察するに非ざれば、其眞相は到底之を把握するを得ざるべく、又從て其眞の對策も之を樹立するを得ないであらう。茲に一般的なる人口の統計的研究の必要が見らるゝのであつて、未だ本書に於て此問題は殆ど取扱はれてはゐないけれども、上記の意味に於て此事象をより大なる視野に於て眺めんとする云はゞ準備過程的意義を本書に認め得るとするならば、私の深く喜びとする所である」と。

本書は二編より成り、第一編「人口統計序說」では人口統計の概念、人口統計調査、統計解析略說の三章を收めてゐる。氏は人口統計學なる獨立的科學の可能性を、その歷史的事由と統計的研究對象としての人口の特異性との二つから肯定するものゝ如くである。統計解析略說は文字通り略說で、僅か十三頁のうちに比例數から始つて相關々